

幼児教育に“ゆとり”と“ゆめ”と“ゆたかさ”を

松隈 玲子

外国語に対する単純な興味から、語学専攻を志していた私が、ふとしたきっかけから幼児教育の分野に足をふみ入れてもう二十年の歳月が過ぎようとしている。

その間、先人たちの残した教育思想や教育方法論の学びはあまりにも多く、また新しい幼児教育論は次々に公表されて、それらの研究と検討にあけくれているうちに、ともすれば、主体性のない、寄せ集めの教育論におちいりそうになることもしばしばであった。

しかし、恩師のお導きと、幼稚園における多くの幼児たちとのふれあい、また三人のわが子とのかかわりあいの中から、子どもちに教えられ、よびさまされながら、私なりに幼児教育において最も大きなものは何であるかを考えつづけることができたように

思われる。

本稿は、「私の幼児教育論」と名づけるにはあまりにも、基本的理念を系統だてての論述でないことにおこがましさを感ずる。しかし、皆さまのご意見、ご批判をいただくための問題提起になればと思ひ、「現代の幼児教育において最も望まれるもの」と私が常々考えていることを総括的に述べてみたい。

現代の幼児教育に最も望まれるもの、それは“ゆとり”と“ゆめ”と“ゆたかさ”をもつ教育であると考ええる。

○ゆとりを大切に思う教育

現代の日本の教育は今更のべるまでもなく、教育機構のひずみによって、その年代を充分に充実して過ごしてこそ次の年代に安

定してすすめるという教育の基本的なあり方さえも失われて、すべてが、次の年代のための準備期間として取扱われる傾向にある。すなわち、幼児期を充実して過ごして初めて望ましい児童期を迎え、充実した小学生生活を経験して中学生時代を迎えるという、きわめてあたり前なことがあたり前に行われず、大学入試にそなえての高校生活、高校受験がすべての目標であるかのような中学での勉強など、およそ望ましい教育の理念からは遠い教育の現状は、ゆたかな土壌をつくり、丈夫な苗を育て、花ひらく日のためのしみに待つのではなく、美しい花を最も短期間に咲かせるために、いかにすれば能率的な栽培ができるかという自然の倫理にさからった植物の即席栽培と同様であり、この現状を幼児教育に波及させてはならないと考える。すなわち、小学校教育の下うけ的な教育が研究されたり、基本的な生活習慣よりも、知育偏重の教育が行われるということがあってはならないと思うのである。

ゆとりのある教育を行うためには、ゆとりをもつ保育者が必要である。しかるに、現在の幼児教育者養成は、必ずしも充分なゆとりをもって行うことのできない現状にある。

まず、短期大学の場合、二カ年の間に保育者としてのふさわしい資格を身につけて卒業させるにはあまりにも短かく、あまりにもいそがしく、とても「ゆとり」などといっているに似つかない現状

である。

一例をあげると、私はここ数年來、新入生に対して最初の講義を行う際に、簡単な読書についての調査を行ってきた。そしてその結果、将来保育者をめざして入学した学生のうちで、日本あるいは外国の児童文学、民話、昔話などを入学前に知っているものが年々減少し、特に最近の調査では、「日本昔話」「アンデルセン」「ペロウ」「グリム」童話等の中で、知っている話が三つ以下というものが20%をこえる現状である。これは私が児童文化という講座を担当している立場からの偏った見方であるかもしれないが、幼児期に、両親や祖父母から、こうした話を聞いたことがない者、絵本などをよんでもらったことがない者、幼稚園や保育所で、先生から「素話」を聞いたことがない者がかなりの数にのぼっていることは、将来、この人たちが幼児教育になるものとなった場合、「お話を聞いたことのない母親」がわが子に「お話を聞かせる母親」になることを願うためには、この二カ年の間に、目先の知識技能の習得のみでなく、ゆとりのある学問の大切さに気付かせることが肝要である。

また、ここで考えさせられたことは、「八岐のおろち」や「いなばの白兔」は知らなくても、古事記成立の年代や事情にはよく通じている学生に、「どんな話が書いてあるか読んでみたい」とは思

わなかったか」とたずねると「内容は試験に出ないし、いちいち本文に興味をもつひまがなかった。児童向の本はもちろん、夏目漱石や川端康成の文学、また、外国文学なども、作者と作品名は覚えたが、受験の参考書を覚えることで頭が一ぱいの所へ」考えなければならぬ作品¹⁾や「読むのに時間のかかる作品²⁾」はとも読む気がしなかった。だから、中・高時代の愛読書は、週刊まんが、少年マガジン、マーガレット、セブンティーンなど、気晴しになるものが多かった」という者が多く、このことを通して、この人たちに、「ゆとり」を大切に思う心を失わせてしまったのは何かということ改めて思い知らされる。すなわち受験のための答案のかき方を学び、どんなに深くきわめたかというよりも、どれだけ知識としてつめこんだかということがうけ容れられ、入試にでるかでないか思考の選択ができるという、きわめて短絡的な価値観を育てられることの多い現代の教育のあり方を思うと、何にもまして「ゆとりの教育」の大切さを世に問いたいと思うのである。

「ゆとり」には、時間のゆとり、こころのゆとり、身体のゆとり、目標のゆとりが考えられる。

もちろんこれらのものは、個々別々に存在するのではなく、互いに関連しあい、影響しあうものであるが、便宜上本稿では、四

つの項目に分類して述べてみたい。

○時間のゆとり

まず時間のゆとりについて考えよう。身辺自立のときはじめて幼児が、一生懸命に自分でボタンをとめようとしている時、靴をはこうとしている時、フォークをもって自分で食べようとしている時、保育者が、時間のゆとりをもって見守りはげまし、時にはほんの僅かな助力をすることによって子どもに「自分でできたよろこびと自信」を与え、このことが次の行動への意欲をさそう原動力になるということは述べるまでもない。しかるに現状をよく見ると、しばしば保育活動における行事や設定保育の時間の延長分を、幼児の基本的生活習慣形成の場の時間を短縮することによって補おうとする傾向がみられ「早くしなさい」「時間がないうよ」「みんなもうすんだのよ」ということばかけによって「時間のゆとり」をとらなかつた結果に対する穴うめをしようとする。このことは、幼児の最もたのしい食事の場においても同様で、食事の準備がおくれたり、食事後の予定を保育者が計画している日は他の日に比べて「おしゃべりしないでさっさと食べてね」ということばが多くなる。こうした指示、命令のことばかけが、幼児の自発性を失わせる結果となることはいうまでもない。

とくに家庭において、幼児期の食事には充分時間のゆとりを考
えることが必要である。一口パンを食べて「ママ、オニのつのが
出来た」「こんどはあひるさんよ」「オニもあひるも全部食べちゃ
った。かなちゃんもゆり組で一ばん力もちになったかもよ」と語
りかける子どもの気持ちに共感し、食事と遊びが混同しない程度
にたのしい母と子の語らいがもてた朝、いつもより勇んで登園す
るわが子の姿に気付き、「さあ早く、おくれるよ、オニでもあひ
るでもいいから、さっさと食べなさい」といわなくてもよい時間
のゆとりがあったということの大切さを痛感する。

時間のゆとりについて、今一つふれておきたいのは、時間の長
さだけではなく、時間の用い方である。

最近はいわゆる「ながら族」のことは通りに、ラジオを聞きな
がら勉強する。テレビを見ながらあみものをするというように、
一定の時間に一つのこと専心するよりも同時に二つ以上のこと
をするのが、時間の有効な用い方であるかのような風潮である。

このことは、幼児をもつ母親においても例外ではなく、赤ちゃん
を抱いてあやすことだけをするのは、時間的ロスだという考えか
ら、赤ちゃんに授乳しながらの読書、テレビ視聴、赤ちゃんを日
光浴させながらのリースあみなど、「ながら保育」を行う者が多
くなった。このことは一見、能率的な保育であるかのように思え

るが、実は、子どもを育てるということにおいて「何が一番大切
であるか」を見失っているのではないかと案じられる。

幼児教育の先達者フレーベルの「人間教育」や「母とおきなご
の歌」における母と子のあり方は、現代の幼児教育に欠けている
ものが何であるかを教えてくれる。うまれたばかりのみどり児を
抱いてそのしあわせを神に祈る母の姿、わが子に注がれていた母
の愛のまなざしがそのまま天を仰いで神を呼ぶ、そこには、心ゆ
たかな母と子とのまじわりの姿をみることができる。

このように、人間では何ともすることのできない大いなるもの
の存在を思い、心に安定をもつ時、それは「気持ちのゆとり」と
なってあらわれ、愛をこめたやさしいことばかけやうたごえは、
それをうけとめるみどり児の心身の健やかな発達をもたらし、や
がては心情をともなった理解を育てていく。

このことは、保育者と子どもの関係においても同様で、一人一
人の子どもを大切に思い一人一人の子どもと心を通わせる時間をも
つことが大切であることはいうまでもない。

(つづく)
(西南女学院短期大学)